夕日のかけら

都神紗茅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夕日のかけら

【Ｎコード】
Ｎ１７２３Ｆ

【作者名】
都神紗茅

【あらすじ】
原作より未来設定。登場人物の名前は「彼」と「彼女」にしてありますが、誰のことかはすぐに分かると思います。

学校の敷地全体に、部活に夢中になっている生徒達の声が響いている。特に、校庭で活動しているサッカー部のかけ声が大きい。さっきから、ナイスシュート！　と叫ぶ声が一際目立っているのだ。

夕日で朱色に染まっている三年の教室には、一人で校庭を眺める生徒の姿があった。

その視線の先には、泥だらけになりながらもボールを追うサッカー部の部員が十数人いる。彼は額を窓にくっ付けて、ガラス越しに部員達の動きを目で追っていた。何を呟くでもなく、表情に出すでもなく。

「今でも後悔してるんでしょ？　サッカー部を辞めたこと」

一人しかいない教室の中に、その声はかなり大きく響いた。その響き方に、声の主自身が一番驚いたくらいであった。それを表面に出すことはしなかったけれど。

予想外の声が聞こえたため、声をかけられた生徒は大きく肩を震わせた。

何故予想外だったかと言うと、彼は声の主がこんなに早く戻ってくるとは思っていなかったからだ。その声の主――彼女は、職員室に用があると言って、さっきいなくなったばかりだった。

彼は、彼女のいるであろう方向へ無意識に振り返った。そして、あのなぁと一言置いてから続ける。

「前に言ったろ？　サッカーは」

「探偵に必要な運動神経をつけるためにやってただけ、でしょ？」

彼がいつものように叩く憎まれ口を、彼女は慣れた様子でさらりと受け流す。彼の悔しがっている様子を見ながら、余裕綽々とした笑みすら浮かべている。

そこに嫌味はないからまだいいのかもな。でも、彼女にはやはり敵わない。彼がそんなことを改めて実感する瞬間だ。

そんな彼にとりあえず構わないままで、彼女は続ける。

「部活をやってた時間は短かったけど、楽しかったことだってたくさんあったんじゃない？」

「まぁな。確かに、運動神経を鍛えることだけでは終わってなかったかもな」

彼の脳裏に、サッカー部に所属していた頃の記憶が走馬灯のようにめぐっていた。

その一つひとつ全てが懐かしく、届きそうな気がして思わず手を伸ばしたくなった。

しかしながら、それらが既に過去のものだと彼自身はきちんと認識していた。手を伸ばしても届かないのだと。事実、そうであるから、あくまでも彼は冷静を装った。その一方で、そんな自分に苦笑していた。ありのままの自分を隠す癖がいつ身についたのだろうと。らしくないとは分かっていたが、急にそんなことを思った。

自分のことを話しているのに、やけに客観的な彼に彼女は一瞬考え込んだ。そして、そんな彼を知ってか知らずか一言だけ口にした。

「全然変わってないね。一人で全部背負おうとする癖。……まぁ、ちょっとの間で変わるわけないか」

「バーロ。今は関係ねぇことだろ？　ってか、そりゃあ蘭だって同じじゃねぇか。オメーにだけは言われたかねぇよ」

「わたしだって新一にだけは言われたくない」

彼女が

「新一にだけは」を思い切り強調させて言った。それから、暫しの沈黙が訪れた。

サッカー部もいつの間にか休憩に入ったのであろうか、二人の耳には何も聞こえてこない。視線を合わせていたせいであろうか、耐えきれずにどちらともなく笑い始めた。

先に笑うのを何とか止めた彼が、言葉を発した。

「じゃ、帰るとすっか」

「うん」

窓際に置いてあった鞄に手を伸ばし、彼は彼女のいる場所へと歩いていく。そして、彼女の隣にたどり着いたと同時に、慣れた仕草で彼は彼女の右手を握った。

小休止がどうやら終わったらしく、校庭は再びサッカー部のかけ

声に支配されていた。そこを横切る途中で、いつもの他愛ない話が始まった。彼が既に推理小説の新刊について熱く語り始めたのだ。

はいはい分かりました、と彼女は彼をまた受け流す。お決まりのように口を尖らせる彼を見て、思わず笑みをこぼしている。

夕日のかけらはまっすぐと二人に向かって伸びていて、綺麗な二つの影を形作っていた。

（後書き）

皆様本っ当にお久しぶりです。夏休み後半に復活する予定……でしたが、中々更新するタイミングを見つけられずにいまして（私は、ネタが浮かんだら一気に書き上げたい性分でして……我ながら困ったもんです）。とりあえずこの突発短編で復活した（つもり）なので、放置プレイ真っ盛りな長編たちにもぼちぼち手を付けようかと考えています。ぼちぼちとは言え、早くても１０月１２日以降になってしまうことは確かなのですが……（ー ー；）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1723f/

夕日のかけら

2011年10月3日20時45分発行